

〈大震災〉出版対策本部の活動 2014年11月～2015年12月

〈大震災〉出版対策本部 広報委員長 鈴木 宣幸

〈大震災〉出版対策本部の活動も2015年3月で5年目に入った。

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に、当時の日本書籍出版協会理事長・副理事長の相賀昌宏氏（小学館）、菊池明郎氏（筑摩書房）と日本出版クラブ会長・野間省伸氏（講談社）、の三氏が話し合い、出版界が一体となって震災の復興に取り組む事を確認し、その中核組織として立ち上げた。その後、日本雑誌協会理事長の上野徹氏（文藝春秋）も加わり、書協、雑協、出版クラブの三団体で支える体制となった。

2013年夏には、読書推進運動協議会も構成団体として加わることとなり、現在は四団体のトップで構成する常任委員会のもとに、運営委員会と広報委員会を設置し、さまざまな活動をしている。活動理念は、2011年の発足時に相賀常任委員会委員長が示した①出版事業を通じた読書環境の復活、②図書販売環境の復活、③それらを通じた人々の心の復活——である。

震災発生から4年7ヵ月が経ち、出版界として何ができるかを常に自問し、意義のある活動を目指してきた。日々、お寄せいただいている「大震災出版復興基金」へのみなさまの思いを形にすることが我々の使命だ。昨年度版・本白書に記載した活動以降の2014年11月から2015年10月までの対策本部の活動報告を以下に記していく。

A. 福島で初めて開催なる！「私のおすすめ本 メッセージカードコンテスト」岩手・宮城は昨年に続き2回目

昨年の課題は、以下の点に尽きる。

岩手・宮城とは異なる原発事故を抱える福島の現状は厳しい。県外への避難者も多く、放射線の高い地区ではいまだに居住することもできない。もちろん対策本部としては福島でも子どもたちを元気にする意味でも、このコンテストを開催する予定でいる。

今年は、関係者の尽力で福島県でも「私のおすすめ本 メッセージカードコンテスト」が開かれることになった。

本を通じた支援で子どもたちの心の支援と図書販売環境の復活を同時に活性化させるという、出版対策本部の活動として設立の理念に添うものだけに、三県同時、福島県開催は悲願であった。

子どもたちに、感動した本、勇気をもらった本を選んでもらい、一枚のカードにイラストや文章で自分の思いを描く。みんなに読んでもらいたいという願いを込めた作品にしてもらおう。いわゆる書店における販促 POP 作成を、読書推進活動の一環として教育の現場に活かしてもらおう試みだ。

地元教育委員会、書店商業組合など関係者の賛同を得て、県下の小中高すべての学校に通知し、新聞紙上でも一般公募を募るスキームは三県で違いはない。同じく図書館振興財団と共同で、賞品の図書カードを提供することとした。

本年から小学生を三部門に分け（昨年は二部門）、小学低学年の部、中学年の部、高学年の部とし、中学校の部、高等学校の部の五部門で個人賞を選考し、それぞれの部門で最優秀賞を出した学校に学校賞を贈る。

岩手県では岩手日報、宮城県では河北新報に事業主催社となってもらっていたが、福島県には有力県紙が二紙ある。そこで、福島県書店商業組合を代表とする実行委員会を主体として福島民報、福島民友の二社の共同事業として執り行うこととした。

10月8日、福島市内で最終選考会が開かれた。応募総数が3,504、参加学校数も149校となり、その数の多さに主催社がうれしい悲鳴を上げ、それ以上に力作揃いで、福島の子どもの読書意欲には、大人の我々がたじたじとなるほどの熱気を感じた。特別審査員の福島在住の詩人・和合亮一さんも、子どもたちのPOPのレベルの高さに驚いていた。

もちろん2回目となる岩手・宮城両県のコンテストも、小学校の部門で「中学年の部」を設けたことで年齢によるレベル差が縮まり、白熱した選考となった。宮城でも応募総数 1,306、参加学校数も 107 校で、こちらも子どもたちの素晴らしい感性に選考委員一同も唸らざるを得なかった。岩手県の選考は、11月16日。小中高併せて応募総数 997 の力作が届いた。それぞれ、三県とも、新聞社主催の表彰式で、緊張感の中にも晴れがましい子どもたちの笑顔が見られた。

B. 震災遺児たちへの図書カードクリスマスプレゼント

2011年の年末にこの支援をスタートさせて2015年末で連続5回となった。我々の事業の中では最重要と位置づけている、被災三県の被災地区に住む未就学児・小学生・中学生・高校生を対象に図書カードをプレゼントする事業だ。

各県の教育委員会、各市町の児童家庭課や「あしなが育英会」などの協力を得てプレゼントつづけている。三県を通して2011年1,449名、2012年は1,293名、そして2013年は1,255名、2014年は1,102名へ。小学生以下は3,000円分、中高生には5,000円分のカード配布を行うことができた。

今年も例年同様にクリスマス前に、岩手県464名、宮城県661名、福島県132名の子どもたちに届けた。合計1,257名。他地域から被災地の故郷に戻ってきた子どもたちがいるとみられ、昨年より増加という結果になった。

毎年、プレゼントに対するお礼状が子ども、保護者から送られてくる。参考書・問題集を購入したり、好きな小説を買ったりと、喜んでいる状況が浮かぶようで、こちらの心が温まる。

C. 青春のエッセー、阿部次郎記念賞に今年も協賛

東北大学では、同大学で教鞭を執った思想家・エッセイストの阿部次郎の功績を記念し、広く全国の高校生を対象にしたエッセーの賞を開催している。代表作「三太郎日記」は、青春のバイブルといわれ、若い世代に読み継がれており、その「三太郎日記」にちなんで、2007年の創立100年を機に、高校生の優れたエッセーを発掘、若年層の読書・活字文化の活性化を目指す賞として始まった。被災地の教育機関の文化事業を支援する意味から、今年で9回目となるこの賞に、ふたたび賞品として図書カードを贈ることとした。河北新報・原稿募集の広告に大震災復興基金のお願いを併せて告知した。課題作品の部のテーマは昨年が「ふるさと」今年が「ライバル」。

本年度は計269点（課題作品130点・自由作品139点）の応募があった。

表彰は11月3日に受賞者を招いて同大学文学部で行われた。

D. TIBF セミナー「紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている——再生日本製紙石巻工場、その後」

7月4日、第22回東京国際ブックフェアでは大震災復興支援のためのシンポジウムを開いた。『紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている——再生日本製紙石巻工場』（早川書房刊）の著者・佐々涼子氏をメインパネラーに迎えた。震災の絶望から向上の復興までを取材したノンフィクション作品。その紹介文にこうある。

『8号（出版用紙を製造する巨大マシン）が止まるときは、この国の出版が倒れる時です』——2011年3月11日、宮城県石巻市の日本製紙石巻工場は津波に呑みこまれ、完全に機能停止した。製紙工場には「何があっても絶対に紙を供給し続ける」という出版社との約束がある。しかし状況は、従業員の誰もが「工場は死んだ」と口にするほど絶望的だった。にもかかわらず、工場長は半年での復興を宣言。その日から、従業員たちの闘いが始まった。

普段何気なく手にして読んでいる本の用紙の大半はこの工場の製品だ。空気や水のようにあって当たり前の「紙」が、どんな努力で維持されているか、思いをあらたにするいい機会となった。シンポジウム会場には、昨年同様、出版復興基金の募金箱を用意して参加者から35,327円にの

ぼる募金が集まった。終了後の佐々氏のサイン会が書協ブースで開かれ、ひとりひとりに笑顔と握手で応対する佐々氏が印象的であった。

E. 改めて被災地を知る——バススタディツアー

今年のバススタディツアーは、TIBFでのシンポジウムと連動したものとなった。4月10日、佐々涼子氏と行く「日本製紙石巻工場見学」ツアーだ。早朝東京発の日帰りの行程で石巻工場見学、佐々氏との意見交換、石ノ森章太郎記念館、自衛隊松島基地、6月運転再開前の仙石線不通区間の視察など、総勢47名の参加者一同が、現地へ赴き現場の人と交流することの大切さを実感した。対策本部はこれからも被災地に出向き、直接の声に耳を傾けながら支援活動を続けていく。

F. 「大震災出版復興基金」を「公益社団法人読書推進運動協議会」に移管、優遇措置も

2013年度から読書推進運動協議会が事務局に加わったことにより、活動を支えるための募金活動を日本出版クラブから読書推進運動協議会に移管した。公益社団法人である読書推進運動協議会への寄付金は寄付金控除または寄付金特別控除の対象となる。手続きには「寄付金受領証」が必要だが、受領証は1回につき3,000円以上の寄付金に対して、希望される方に郵送する。くわしくは、読書推進運動協議会へ。

ホームページ：<http://www.dokusyo.or.jp/>

募 金 先

- ①三井住友銀行 飯田橋支店
口座名：大震災出版復興基金 公益社団法人読書推進運動協議会
店番号：888 口座番号：普通預金 7086755
- ②三菱東京UFJ銀行 神楽坂支店
口座名：大震災出版復興基金 公益社団法人読書推進運動協議会
店番号：052 口座番号：普通預金 0121380
- ③文化産業信用組合 本店
口座名：大震災出版復興基金 公益社団法人読書推進運動協議会
店番号：001 口座番号：普通預金 0201974
- ④郵便振替
口座名：社)読書推進運動協議会 大震災出版復興基金
口座記号：00140-6 口座番号：664439

(振込手数料および振替手数料は、ご本人さまのご負担でお願いいたします)

また、今年は震災から5年の節目の年となる。この出版対策本部の活動も一定の区切りになると考えている。お寄せいただいた基金を活用して、子どもたちの心に長く残る「復興イベント」を被災三県で計画であることも付記しておく。みなさまのあたたかいご支援をお願いする次第です。